

欧米における浄土真宗のイメージへの反論

——現代の日本人も求める宗教性——

ケネス田中

はじめに

皆さまこんにちは。先ほどから数人の先生に「今日の講演を楽しみにしていますよ」と言われました。私も龍谷大学真宗学会の大会でこのように講演できることを非常に楽しみにしていました。しかし、不安もあります。何故かと言いますと、川添先生の紹介にありましたように、私はIBS（Institute of Buddhist Studies、米国仏教大学院大学）で学んだ後、そこで教員にもなりました。そのIBSから見た龍谷大学というと、遙か上の方にあって、私がこのような大会で基調講演をさせていただくというのは、未だに信じられないというのが本音です。

先程、川添先生のご挨拶と私の紹介を聞きながら多くの龍大の先生方を思い出していました。特に、信楽先生、浅井先生、浅野先生、普賢先生、岡先生、上山先生、武田先生のお顔が浮かんできました。私としては学術的な大先輩であり、また信仰上の師でもあります。また、ここで話すということについて、私の専門が真宗学ではないということも、私はやや気にかかるところです。しかし、それはご承知であると思いますので、精一杯話させていただきます。

私の専門は、広い意味では浄土教（Pure Land Buddhism）となります。

カリフォルニア大学の博士論文は浄影寺慧遠の『観經義疏』についてでした。それを英訳し、教義的な研究を行いました。この博論は、一九九〇年にニューヨーク大学から出版されました。従って、学術的にはそこが根拠となっています。ですが、若いころからずっと真宗が私の宗教心の据わりの基となっています。浄影寺慧遠を博士論文のテーマとしたのも、私自身の真宗理解を深めるために選んだもののなのです。

そして、東京大学インド哲学学科での修士課程時代は高崎直道先生の下で、「如来蔵思想の信」の研究を行いました。ですから、大乘仏教である如来蔵思想と中国浄土教を大学院で専門としてきましたが、常に親鸞思想は私の根底に流れているテーマとなっていたのです。

はいそれでは、私が経験してきた欧米の浄土真宗を背景に、今後の真宗がどうあるべきか、という課題について話していきたいと思います。真宗が現代においてどのように活躍すべきか、ということは非常に広いテーマであります。もちろん、真宗が広まり有効に伸びていくためには、教えを伝える人々の人柄や宗教性、または組織の質や適切性、そういうものの方が実は教学よりももっと大切かもしれません。しかし、今日は教学というほどまでいきませんが、教えに踏み込んで、私がアメリカに住んでいたときの経験も基にして話させていただきたいと思います。

「キリスト教仏教徒」と見られる真宗

それでまず皆さん、レジュメをお持ちだと思いますけども、全部で四頁になります。最初に話したいことは私がアメリカで体験した出来事です。それは数年前、アメリカの曹洞宗の五十周年記念の集まりがありました。私も参加してもらいました。ほとんど知らない人でしたが、隣に座ったのは五十歳くらいの白人の女性で、お互いが自己紹介しました。彼女は絡子を着けた

米国曹洞宗の僧侶のようでした。そして私は「浄土真宗所属のケネス田中です」と言いましたら、彼女はニコツとして、「ああ。あなたがキリスト教仏教徒なんですね」と答えのです。英語では、「Oh so, you're the Christian Buddhist!」でした。

「クリスチャン・ブディスト」ですよ。皆さんが「ああ、あなたがクリスチャン・ブディストですね」と言われたらどんな反応をされるでしょうか？私は「カチン」ときました。カチンときて、もちろん私は真宗がそのように周りで言われていることは知っていますけども、実際に面と向かって言われたのは初めてだったのですね。それで、「実は」と言って反論しようとしたら、記念行事がちょうどその時始まったのでできなかったのです。その後も真宗のことを説明するつもりでしたが、あいにくチャンスを失ったのです。

実は、彼女が「So, you are the Christian Buddhist」と言った時、私の心の中でもう一つ言ったのは「Oh my God!」でした。(笑い) 良かった、結構うけましたね！ところで私の専門は浄土教じゃなくて実は駄洒落かもしれません。実はですね、先程川添先生が、私が中村元東方学術賞を受賞したということをおっしゃっていただきましたけども、実は受賞が決まって公開された時、Facebook に私の知人がそのことを載せたのです。そうしたら別の知人が、「何、ケネスさんが駄洒落大賞かなにか受賞したの？」という返事があったのです。私もその人は、知らないのですよ。「駄洒落大賞受かったの？」と知らない人がそんなに言うということは、私の評価はそっちのほうで高いのだなと、実は内心嬉しく思っているのです！先程、森田先生と話していて、教育にはやはりユーモアをもっと取り入れなければならないということで意見が合いました。私も武蔵野大学では、平均二百人くらいの十八歳を対象にした必修授業を担当しています。授業では、駄洒落などのユーモアを交えながら話を進めることにしています。

とにかく、私が「キリスト教信徒」と呼ばれたこの出来事は、今日のテーマについて、象徴的なことなのです。つまり、欧米における浄土真宗のイメージの一角なのです。真宗の教えとキリスト教が類似しているということは長年言われてきたことです。皆さんもそういうことを御存じだと思いますが、この出来事において私は真宗がキリスト教と似ていると見られていることを肌で感じました。なんで似ているとかという理由は、教義的な類似性にあります。例えば、阿弥陀と God (神)、浄土と Heaven (天国)、凡夫と sinful being (罪人)、信心と faith (信) という類似した点が多々あるのです。

真宗とキリスト教の類似性

そしてもう一つ、プロテスタントの著名な神学者カール・バルト (Karl Barth, 1886～1968) という方が、実は真宗を高く評価したのです。他の宗教に関しては非常に低く見たのですが、特に真宗はプロテスタントの教えにとっても近いと高く評価したのです。そういうこともあって、親鸞の教えがプロテスタントの神学に非常に近いということはよく知られています。もちろん、カール・バルトは、真宗を高く評価しましたがプロテスタントのレベルにまでは至っていない、ということは言っています。

あと、西洋の古代宗教の影響があったというイメージが強いですね。要するに浄土教自体が西洋からの影響を受けたという意見です。二千年くらい前、浄土教が興る段階にゾロアスター教 (拝火教) の影響があって、ゾロアスター教の Mithra 神が「無量光」という仏の概念に影響したとか、zrvan ākarana という概念が「無量寿」という考えに影響を与えたというような説があります。そして、丁度中国の唐の時代には、ネストリウス教 (「景教」というキリスト教の一派が、善導大師が活躍されていた時に中国に活動していた

のです。ですから、善導大師が活躍されていたその時に「他力的」な理解が深まったということを根拠として、特に保守的キリスト教徒の指導者は、浄土教にはネストリウス教の影響があったと主張するのです。一般のキリスト教徒の中にもそのような考えを持っていて、それに基づく意見を直接聞いたことがあります。というところで、キリスト教の影響ということが、欧米では真宗のイメージの一部を構成しているのです。

本流から外れている真宗

次はですね、仏教の本流から外れているというイメージもあります。あまり詳しくは説明することはできませんが、アルベルト・シュヴァイツァー (Albert Schweitzer) という有名な神学者・哲学者・医学者は、一九三六年に、「もちろん、親鸞の教えは仏教に対して侮辱的存在 (outrage) である」と発言しているのです。また、ハインズ・ベハート (Heinz Bercher-t) というドイツの仏教学者は、より最近の一九八六年に、「それ (浄土教) は、『仏』という考えを真反対なものと捻って捉えた。この考えの代表者は、浄土真宗の宗祖である親鸞聖人である。……ただ阿弥陀の恩寵 (grace) によってのみしか我々の救済がなりたたないのである、と考える」と批判しているのです。

それで、これは欧米だけではなくて現在日本で仏教学者としてよく知られている佐々木閑教授も似たようなことを言っています。

「たとえば親鸞の作った浄土真宗は、『自力で苦しみから逃れようとしても、愚かなわれわれには無理だ。そんな私たちを哀れに思った阿弥陀というありがたい仏が、極楽という世界から救いの手をさしのべて下さっている。われわれがなすべきことは、その阿弥陀の力にすがって身を任すことだけだ』と説きます。親鸞の教えは間違いなく宗教としてす

ぐれていますし、自力で努力することのできない状態にある人にとっては非常に有り難い支えとなるのですが、「釈迦の仏教」とは全くの別ものです」。¹

これは今の仏教学者、ましてや日本の仏教学者の発言です。私は、佐々木先生とは親しくしていますので、今度ゆっくりこのことを実際にどう思っているのか話したいと思っています。

以上のように、西洋と日本においての真宗のイメージを三つまとめることができますと思います。(一)仏教の主流より逸脱しているだけでなく、仏教の本質に反している。(二)外来宗教の影響を受けた、仏教内の「キリスト教版」にしか過ぎない。(三)求道者は、阿弥陀の恩寵 (grace) にただ縋って任すのみである。もちろん、このような意見があっても、アメリカでは浄土教に興味を持って改宗する人もかなり増えています。しかし、広い範疇から見ればこのような真宗へのイメージが結構濃厚に存在しているということです。

目覚める体験としての信心

それで私は、この以上の点について、私なりに反論してきたつもりです。その際、真宗は大乗仏教を逸脱はしていない、ということを主張してきました。例えば、インド大乗仏教の如来蔵思想を代表する『宝性論』には、すでに法身（彼らのいう真宗の「恩寵」のような教え）が説かれているのです。更に、親鸞が言う「信心の智慧」と類似する智慧的な「信解・勝解」（サンスクリットで *adhimukti*）もしっかりと見られるのです。つまり、六世紀ごろのインド大乗仏教の一角である如来蔵論書には、親鸞と真宗教義に見られる「法性法身」や「信心」とほとんど異ならない教えが、既に説かれていたのです。従って、真宗が仏教から逸脱しているということはない、ということをいくつかの論文で書かせていただいています。

それで先程、川添先生が紹介してくださった『智慧の潮－智慧・主体性・社会性』（武蔵野大学出版会、二〇一七年）を今年の初めに出版することができました。川添先生もこの論文集に論文を執筆して頂いています。私がこの論文集の編集者の役目を務めたのも、常に欧米における浄土真宗のイメージを念頭に置いて、それに反論したいということの延長だからなのです。

そこで親鸞の教えは基本的には「目覚める宗教」であり、「信じる宗教」ではない、というキーワードを使わせていただいています。私の中では「目覚める宗教」または「目覚めの宗教」と両方使っています。時には「目覚めていく宗教」でもいいと思いますけども、要するに「信じる宗教」ではないということです。その根拠としては、私は『大智度論』のかの有名な「仏法の大海は信をもって能入とし、智をもって能度とする」を挙げたいと思います。このような文章があるが故に、浄土真宗が信心の「委託」の側面だけを強調すると、ここでいう「信をもって能入」というレベルに留まって信心が捉われてしまうのですね。そうではなくて私は、親鸞の言われる信心というものは智のほうに近いと言わざるを得ないと思います。だから「信をもって能入」とするほうではなくて「智をもって能度」とする、そちらのほうが信心に近いのだということを、『智慧の潮』中の私の論文「親鸞における信心の智慧の側面－宗教的視点」を強調させていただいています。

そこでですね、信心の「体得者」という言葉を私は使っているのですが、これは「体験」(experience)という視点の強調の現れです。そして信心の体得者には四つの側面があると思います。それは、「委託、歓喜、無疑、智慧」です。私は「智慧」に焦点を当てていますが、私は「委託」という側面・イメージが欧米における真宗のイメージの原因となっていると思うのですね。委託すること自体は悪い事ではないし問題でもないのですが、ここで問題となるのはそれだけに集中しているところです。従って、真宗はそれだ

けであるというイメージが一人歩きし過ぎて、先程のような批判的なコメントを被ってしまうのだと思います。信仰心の委託という側面は非常に大切なことであって、私が智慧を強調するからといって委託を軽視するということではありません。ただ智慧の側面が軽視され過ぎていることが問題なのではないか、ということです。

規範的叙述と体験的叙述 及び 信心の智慧の側面

はいそれですね、このあたりは教義的に難解なところもありまして詳しくはできませんが、要点だけを述べさせていただきます。まず私は、「normative statement」規範的叙述と「experiential statement」体験的叙述という二つの言語的な形態があると思います。浄土真宗の教義の中心はどちらかというとな規範的叙述、「こうである」と客観的に正しさを示すような言語なのです。しかし、そこで私はもっと体験的叙述という側面から信心を見ていこうと思っているのです。そうするとレジュメには、『教行信証』からの引用がありますので読ませていただきます。

「信楽（＝信心）は、すなはちこれ真実誠満の心なり、極成用重の心なり、審驗宣忠の心なり、欲願愛悦の心なり、歡喜賀慶の心なるがゆゑに、疑蓋雜はることなきなり」。²

この中で、この引用・言葉を中心にして信心とはどのようなものであるのかということを分析するにあたって、レジュメには、「真、実、極」という用語は「信心」を客観的に捉える規範的叙述である、となります。つまり、「こうであるよ」、と言っていると捉えるのです。そして残りの他に沢山ある用語は主観的に捉える体験的叙述である、となります。つまり、「真、実、極」という用語のみが規範的叙述であるのです。

従って、残る「成用重、審驗宣忠、欲願愛悦、歡喜賀慶」は、主観的であ

る体験的叙述なのです。そしてそれらは、先程分類した信心の四つの側面「委託、歓喜、無疑、智慧」に当てることができると思います。つまり、「重」と「忠」が委託の側面を示す。「歓」、「喜」、「賀」、「慶」が歓喜の側面を示す。そして「疑蓋無雑」が無疑の側面を示す。そして、本論で一番重要なのは「審」と「宣」が智慧の側面を示す、ということです。

ここでの私の智慧の定義はですね、「高度な智慧」(prajñā) も含むが、「認知する」(to cognize)、「知る」(to know)、「理解する」(understand)、「気づく」(to become aware)、「直感する」(to intuit)、「目覚める」(to awaken) というような幅広い意味を含んでいます。ですから智慧といっても「prajñā」という高いレベルのものだけではなく、もう少し認知的な意味も含むということを、前もって説明させておかせてもらいます。そしてこの定義はですね、先程言った欧米での真宗に対するイメージの反論をより鮮明にするのが目的なのです。

それでは、この「智慧」というところをもう少し強調したいと思います。『教行信証』に出る親鸞の「審」と「宣」という漢字について、本願寺の公式英訳では、「審」は discernment (識別力、眼識、洞察力)、「宣」は clarity (明快、明晰) となっており、本論の智慧の定義に十分含まれるといえると思います。ですからレジュメの B のところで言おうとしたのは、この信心を定義する親鸞の引用文では、ただ委託するだけではなく智慧の側面がここに現れているということです。

次にレジュメの三頁にいきますけども、信心の智慧の側面が、かの有名な『正像末和讃』にでていることはよく知られています。下線を引いている部分を読みますと「信心の智慧」と「智慧の念仏³」とあります。私はこれをもっと外に向かって強調すべきだと思います。強調されている方もいますが、ただそれもどちらかというと阿弥陀の智慧なのですね。つまり、先程言った

「こうでありますよ」という規範的叙述（normative statement）の視点から、阿弥陀様の智慧が我々に届いているということのみが強調されているのです。つまり信心は智慧だが、それは阿弥陀の徳であるということにのみ焦点が当てられているのです。

この点はもちろん重要ですが、今日の私の講演のテーマの視点から重要だと思うのは、次に挙げました（和讃の）左訓のほうに出ている箇所です。皆さんも御存じのように、レジュメ 3 頁 C-1) のところは、私が強調している体験的叙述です。体験的叙述というのは求道者が体験することなのですね。ですから「みたのちかひはちゑにてましますゆへに、しんずるころのいでくるは、ちゑのおこるとしるべし」。⁴この「ちゑのおこるとしるべし」は、伝統教学的にどのように捉えるのでしょうか？ 私の印象では、規範的叙述として扱うが、体験的叙述としてはほとんど理解していないように見えます。

実はですね、私は今年の三月で退職いたします。それで時間ができますから、もっと真宗学を体系的に学びたいと思っています。東京には、築地本願寺内の東京仏教学院がありますよね。あそこに行って勉強したいと言ったら、「それは駄目だ。先生のような人が行ったら困る」と言われました。私はそんなことはないと思うのです。本当は京都が近かったら龍大に来て勉強したいと思っているのです。ということでまだまだ学ぶことは沢山あると思っています。

さて文章に戻りますけども、求道者が信心の智慧・智慧の念仏を、阿弥陀からいただくことは重要な点ですが、それがその人にどう自覚されるかということが明らかでなければなりません。そうでなければ、やはりキリスト教とあまり変わらないのではないかと思います。目覚めの宗教であれば、「ちゑのおこるとしるべし」というこの文章の意図をより明らかにするために、智慧がどのようにして興るのか・顕れるのかということをより明確にしなければ

ればならないと思います。それは、「智慧は興る」と親鸞ははっきりと付け加えておられるからです。つまり、智慧は求道者に置いて体験的に自覚できるものである、と私は理解さざるを得ません。

そこで驚原知康（内藤知康）先生が、若い時の論文の中で、「信心の具徳であるところの智慧（涅槃の真因となる智慧）が機相の上に相発すると考えることもあながち不当ではないと考えられる」と述べられています。ですからここに機相の上に相発する、現れるという意見ですね。このご指摘は非常に重要だと思います。ですからこれをもって私は、欧米の浄土真宗のイメージに対応できる、対抗できる根拠であると思います。

それで、『智慧の潮』に収められている私の論文の中でも言及させてもらっている、もう一つ強調したい点があります。この（レジュメ三頁D）体得者の修行段位としての考察で、これは『教行信証』に出ています。要するに信心の体得者のような方が、十地中の歓喜地に値いし、または上座部仏教で説かれる預流果（srotāppana）という初果の聖者に値する、という箇所がここ（レジュメ）に引用されています。

「しかれば真実の行信を獲れば、心に歓喜多きがゆえに、これを歓喜地となづく。これを初果に喩ふことは、初果の聖者、なほ睡眠し懶堕なれども二十九有に至らず」。⁵

ということは、私は先程から信心の智慧の側面を強調させていただいているのですが、ここでは修行段位として信心を獲ればこのような高いレベルに値するよと言っているということです。これをどう理解するかには、色々な解釈あると思います。一つは、親鸞聖人は多分、不退転というか正定聚のことを強調したかった、と考えられます。ご承知のように、初期仏教の考えでは、預流果に達するともう後戻りせず上しか行かないことが保証されているのです。親鸞は、そういったことを強調されたかったのだと思うのです。だから

こそ、このレベルに達した信心の体得者とは智慧という側面を体得された者であると思うのです。

そして最後に、以上のように、智慧の側面はかなり濃厚であるので、信心の英語訳としては、今本流となっている entrusting (委託) よりも、智慧の意味を含む realization (気づき)、awareness (自覚、意識)、または awakening (目覚め)の方が妥当であると思います。そして実はですね、圧倒的に多い英訳は entrusting です。Entrusting というのは、trust が信頼するという意味で、entrusting は委託するというような意味になるのです。しかしこれはまた、最初に申しましたイメージを強調するに過ぎないと思うのですね。ですから私は今論じてきましたように、(信心には) 智の側面があるのですから、やはり「気づき」とか「自覚」とか「目覚め」を表す英語のほうがもっと伝わるのではないかと思うのです。

というところで、「信心・shinjin」だけでも駄目です。本願寺訳の責任者であった上田義文先生は、翻訳の時に「信心・shinjin」とそのままにして英語に訳さなかったのです。これは英語圏で「悟り・satori」と同じようになるようなことを期待していたと聞いています。鈴木大拙の実績として「悟り・satori」がそのまま英語になったので、上田先生も「信心」が同じように誰でも分かる英語の言葉としようする狙いであったと聞いています。しかし、現段階では、その狙いは実現されていません。

ですからやはり「信心・shinjin」だけでは足りないので、そこで英語に訳するとすれば、entrusting というのは一つの側面に過ぎず、信心全てを代表するような言葉ではなく、どちらかというとこの三つ (realization・awareness・awakening)の方がいいかなと私は思います。これは私の意見なので、他の方とは異なります。例えば、私の親友であるマーク・ウンノ先生 (オレゴン大学准教授)、故タイテツ・ウンノ (海野大徹) 先生の息子さんと、今

アメリカで浄土真宗を広めている重要な方であると思います。ウンノ先生は、信心の訳として主に entrusting を使っていらっしゃるのですね。私は、先ほど述べたように、realization・awareness・awakening を優先していますので、この点についてウンノ先生と議論したいと思っております。

ところで、長年アメリカでの真宗の有力な学僧と言えば、タイテツ・ウンノ先生とアルフレッド・ブルーム先生でしたが、この数年の間、お二人ともお亡くなりになりました。ですから新しい世代がバッテリー・ボックスに立たなければなりません。開教使の中の学僧やマーク・ウンノ先生のような方々に頑張ってもらわなければなりません。私もアメリカに戻る度に講演等を行って頑張っているつもりです。

アメリカ仏教の光景 ― 写真を通して

次はやや別の課題に移りたいと思います。私は『アメリカ仏教―仏教もかわる、アメリカも変わる』という本を二〇一〇年に出しまして、その中にある写真を見て頂きたいと思います。専門家が撮った写真ですからいいものが多くあると思います。まずこれ（写真）を見せながらこれから話したいのは、特に欧米において何か大きな変動が起こっているということです。それは、宗教的なパラダイム・形態が根本的に変わりつつあるということです。その環境の中で、アメリカで仏教がかなり伸びているという話に繋がっていくのです。

- ① これはニューヨークのセントラルパークで行われた「Change Your Mind Day」（心を変える日）というものです。ニューヨークで発行される『Tricycle』という仏教雑誌があります。立派な高いレベルな雑誌で、年間四回発行されていて、毎回一〇万部ほど発刊されているのです。この雑誌が、一年に一回この「Change Your Mind Day」というイベントを主催

しています。そしてどちらかというと、瞑想が中心の課題となっています。

- ② この写真はとてもアメリカ的だと思うのです。芝生の上で座った人々は、礼拝している者もいれば、正座の人、足を組んでいる者、足を組んで合掌・座禅している人、そしてこちらの人は何もしていません。個人主義の色が強いアメリカなので、皆が一緒ではないというところも面白いかなと思います。

- ③ はい次は、ダライラマ十四世です。アメリカの議会においてブッシュ大統領夫妻と上院下院の両議長からゴールド・メダルを受賞しているところです。私が子どもの時、一九六〇年代の前半では、このように仏教の僧侶が大統領などの前で、受賞するということなどは考えられなかったことなのです。なのに、実現して、また、それがそれほど異質なことはなくなったということは、仏教がアメリカでも根づき受容されてきたということ語っているのです。ダライラマは、アメリカでは非常に人気があって、師の講演には何千人、時には何万人も集まるのです。

- ④ 次にこれらは、初期にアメリカに伝道した方々です。この方は釈宗演という臨済宗の僧侶で鈴木大拙の恩師でもあります。釈宗演が一八九三年に世界宗教大会に参加して、それが、鈴木大拙がアメリカに渡るきっかけになりました。次にこの方は、スリランカのダルマパーラ氏（Anagarika Dharmapala、一八六四～一九三二）です。英語も達者で、髪も長く、僧侶ではありませんでした。どちらかというとイエス・キリストによく似て、結構ハンサムだったのでアメリカの女性によくもてたそうです。また、話もとても上手くて、科学の理論的な側面を持って仏教の教理を説いたのです。当時からもスリランカでは、仏教が科学的であるということは主流な考え方だったので、ダルマパーラの主張は正論（セイロン）だったのです。（笑）……若い人は、今の駄洒落が分かってないと思います。セイロンが

スリランカの昔の国の名前だとは、知らないようですからね。

- ⑤ 次のこの方はオルコット大佐（Henry Steel Olcott、一八三二～一九〇七）です。初めてのアメリカ人改宗者です。スリランカに渡って仏教を厚く復興した方です。ですから、今スリランカに行っても、この方の名前はまだまだよく聞きます。日本との関係として、オルコット大佐は旗（仏旗）を一八八九年に、日本に来た時に持って来たのです。当時はキリスト教の伝道を日本の多くの仏教者が恐れていたのです。明治に入って多くのキリスト教伝道者が来て、キリスト教の国になってしまうのではないかという不安が高まっていました。実は、私が所属している武蔵野大学の学祖高楠順次郎先生も、非常に懸念を抱いていたそうです。だから明治の時代はキリスト教に対抗するという意識がとて高く、オルコットも上座部仏教と大乘仏教が統一して対抗しなければいけない、と感じてわざわざ日本に二回（二回目、一八九一年）も来ています。仏旗を持って仏教をもっと強化したいという意識があったそうです。

- ⑥ 次にこれがポール・ケーラス（Paul Carus、一八五二～一九一九）という方で鈴木大拙の面倒を見た人です。この人は、最終的に仏教徒にはなりませんでしたが、いくつかの仏教への本を書いています。「科学の宗教」とは仏教である、というふうに考え非常に仏教へ力を入れてきました。

因みに、ケーラスの著書の一つは、日本でも良く知られている芥川龍之介の『蜘蛛の糸』と深い関係があるのです。実はこの説話は、ケーラスが一八九五年に著した『カルマ』に基づくものであり、この本は、鈴木大拙によって一八九六に和訳され、それを題材として芥川がこの説話を一九一八年作成したのです。この『カルマ』もケーラスが主張する科学的な因果論を説く説話として作成されたものであったのです。⁶

- ⑦ 次に、ダライラマの後ろにいるブロンドの方が、映画俳優のリチャー

ド・ギア (Richard Gere、一九四九～) です。ここで強調したいのは、彼が熱心な仏教徒であるということです。彼は、最初は臨済宗で仏教に入って、その後はダライラマの弟子になって、今でも毎日朝四十分、夕方四十分メディテーション・瞑想をされるそうです。そして色んな活動をされています。ですからメディテーションに惹かれたということが、ギア氏を仏教徒に改宗させ、その後の社会慈善事業などの種々な仏教的行動に繋がっていったのです。

- ⑧ 次、これはダライラマがお話をしているところですが、これもニューヨークのセントラルパークだと思いますけども、多分一万人は軽くいると思います。これほどの人たちが集まっていて、特に前の方にいる人たちの表情というのは、本当に真摯で素直にダライラマを尊敬し崇めているということを表していると言えます。
- ⑨ 次が、佐々木承周という百三歳でなくなられた臨済宗の僧侶です。一緒にいる方は、アメリカ人のレナード・コーエン (Leonard Cohen) という著名な作曲家・詩人・作家で、この人も僧侶になっているのでこのように衣を着けているのです。
- ⑩ 次は、花まつりで花御堂に向かって礼拝していますね。何宗の人かは分かりませんが、若いアフリカ系アメリカ人が仏教徒であるということが、かなり興味深い現象だと思います。
- ⑪ この人は誰でしょうか？ (問い掛け) そう、スティーブ・ジョブス (Steve Jobs) の若い時です。実は彼と私の育ったのが同じ地域で、私と同じ中学校に行ったのです。ただジョブス氏のほうが若いので、一緒にこの中学校に通ってはいません。その上、もちろん中学校のときはまだ有名じゃなかったですね。しかし、彼が育った地域やその環境のことは、よくわかります。そして、彼が仏教の瞑想に強く惹かれたのは、一九七〇年代でした。

ジョブズ氏は、曹洞宗のサンフランシスコ禅センターの指導の下で瞑想に励んだそうです。この写真の興味深い点は、マッキントッシュというアップル社の初代のコンピュータが、結跏趺坐しているジョブズ氏の膝の上に置かれていることです。IT を代表するコンピュータと跏趺坐が重なる、象徴的なシーンですね。

- ⑫ これは年をとったスティーブ・ジョブズですね。ご存知のように彼は二〇一二年に亡くなりましたが、二〇〇五年にはスタンフォード大学の卒業式でかの有名なスピーチを行いました。彼は死について語っているのです。こういうことは、やはり彼が仏教的な価値観を身につけていたということに由来すると思います。死というものは必ずしも「負けじゃない、失敗じゃない」。タブー視されていた死ということに対して彼は積極的にバネとして死を転換させて、生死一体という仏教的な考えを持ち出したのです。それも、大学を卒業していく若い人たちに、死のことを話したのです。非常に異例なことです。ジョブズ氏は、死ということを念頭に置けば、我々が重要なことを決断するときに躊躇せず、失敗するかどうかという迷いも乗り越えることができると主張したのです。つまり、死を意識することによって、もっと積極的に前向きに生きられるということです。興味がありまたら、この有名なスピーチは、YouTubeで「スティーブジョブズ スタンフォード大学」で検索すれば、日本語訳付きで見ることができます。
- ⑬ この方は、アダム・ヤウク（Adam Yauch）というラップバンドの「ビースティボーイズ」（Beastie Boys）の主任で、この前に座っている人です。彼も残念ですが、五十歳くらいで亡くなったのですが、「菩薩の願」（Bodhisattva Vows）いという立派な曲を作曲しています。中身はすごく充実したものだと思います。ネットで、「ビースティボーイズのアダム・ヤウク」を検索したら、彼の「菩薩の願い」の曲がでています。

- ⑭ 世界的有名なゴルファーであるタイガー・ウッズ (Tiger Woods) も仏教徒です。ただ、お母さんがタイ国出身の仏教徒なので、彼はリチャード・ギアのような改宗者ではありません。しかし、著名な仏教徒の一人です。
- ⑮ これはアメリカで、建物の面積としては一番大きいお寺です。台湾の仏光山という一派のアメリカ支部に所属し、ディズニーランドの近くのハシエンダハイツ市にあります。ここに集まっている方たちは、ほとんどが台湾出身の尼さんたちです。台湾の尼さんの多くはとても迫力があって教育レベルも高いということで、男性のお坊さんたちは、かなり躊躇しているようです。ですので、尼さんに対してどちらかという、ビクビク（比丘比丘）しているようです。(笑)
- ⑯ これは南方系のテーラワダ仏教のお寺です。典型的なカリフォルニアの丘の中にあってとても新しい形式のお寺ではないかと思います。
- ⑰ この方は、ティック・ナット・ハーン師 (Thich Nhat Hanh) の平和マーチと言って、ロスの道路を行進しているところです。世界的には、ダライラマに次いで非常によく知られているティック・ナット・ハーン師です。
- ⑱ この真ん中に映っている方は、衣でわかるように浄土真宗の僧侶です。師は、レベッカ・マクドナルド (Rebecca McDonald) という方で、IBS (米国仏教大学院) 時代の私の同級生です。この写真は、レズビアンのカップルの結婚式を司祭した時のものです。アメリカの浄土真宗は、早い段階から同性愛者の結婚式を受け入れてきたこともあって、そういう面では同性愛者のグループから、好感を持たれていると言えます。
- ⑲ これは社会参加運動を象徴するものです。仏教者がこのようにして社会の問題に取り組んでいるところです。彼らは、ビルマの仏教僧侶の弾圧や

中国の人権問題などに対して声をあげ、サンフランシスコの金門橋（ゴールデンゲート・ブリッジ）を進行しているところです。女性の僧侶も結構いますね。この辺の方は、皆女性です。アメリカの改宗者の中には、女性僧侶としての指導者が非常に多いのです。

- ⑳ これが典型的な仏教メディテーションセンターですね。多くの方々が、座禅をしています。それも大きなステインガラスと建物の雰囲気からすれば、以前はキリスト教の教会だったようですね。多分、先ほど話しました臨済宗の佐々木承周老師の道場だと思います。

- ㉑ 次の一連は、カリフォルニア州パークレー市の禅宗のお寺のものです。花御堂を用意し、子供たちと一緒に釈迦様の誕生日を祝っているところです。この方が住職で、メル・ウェイツマン（Mel Weitsman）老師です。そして次は、花御堂を飾っているご婦人たちです。彼女たちは楽しそうで、また素晴らし笑顔ですね。そして次は、花祭りの法要の光景を描いたものだと思います。小さい子供たちも一緒に、ほのぼのとさせてくれる雰囲気だと思いませんか？そしてこれは、仏陀の誕生日を祝うバースデーケーキですね。バースデーケーキとはすごく発想がアメリカ的だと思いませんか？そしてケーキの上には、『般若心経』の無常観を表す文句がいくつか書かれています。

- ㉒ 最後は、南カリフォルニア仏教連合会主催の「ブッダの誕生日」を祝う集まりです。仏教はまだ少数宗教ですから、なるべく多くの仏教宗派がこのようにして集まるように努力しているのです。ところで、世界で一番仏教の宗派の数が多い都市はどこだと思いますか？答えは、バンコクでもなく、台北でもなく、京都でもなく、なんと、ロサンゼルスなのです。百以上の宗派がロスに共存しているのです。全ての主な宗派はロサンゼルス、またはサンフランシスコとかシアトルとか、そういうアメリカの大きな都

市に集まっています。この点は、非常に興味深い現象だと思いませんか？

アメリカ仏教と宗教パラダイムの変動

次に、欧米の仏教または特に宗教に対するイメージが、どう変わりつつあるかということをお話することにします。その中で、今日はアメリカ仏教について詳しく話す時間はありませんが、簡単に要点のみを述べますと、まず、この四十年間で仏教徒が一七倍も増えたことは、注目されるべきだと思います。現在、三五〇万人くらいになっていて、全米人口の約一・二％です。それ以上に仏教徒ではなくても仏教に賛同する同調者もかなりいて、私は、約二百万人と推定しています。さらに、「宗教やスピリチュアリティに関して強く仏教に影響されたという人」たちは、ある統計では、驚く二千五百万人という数になっているのです。そうすると、約全米人口の一割が、仏教徒・同調者・仏教に強く影響されているということになるのです。そういう面では、アメリカでは仏教に興味を持っている人がかなり増え、仏教の存在感が増してきたということです。

そこで、この現象が何を象徴しているかと言いますと、先進国の宗教形態の変容・変貌、所謂、パラダイムシフト (paradigm shift) が起こっているのです。つまり、「目覚める宗教」という傾向が高まっているのです。これについては、私の『アメリカ仏教』という本に詳しく書いています。まず、著名な宗教社会学者ウェイド・C・ルフ (Wade C. Roof) 教授は、このパラダイムシフトに関して色々と発言されています。この先生が主張される興味深い点とは、従来の伝統宗教と新しいスピリチュアリティの違いです。従来の伝統宗教の特徴は、神 God、罪 sin、信仰 faith、懺悔 repentance、そして道徳 morals という五つのキーワードでとらえることができる。しかし、今パラダイムシフトが起こっていて、新しいスピリチュアリティが高まり、

そのキーワードを、連帯性 connectedness、一体性 unity、平和が peace、調和 harmony、落ち着き centeredness に纏めている。これらを従来の宗教形態のキーワードと比べると、かなり異なるのです。

その二つの中で、新しいスピリチュアリティの方が高まっているのです。特に若い人の間では、「私は宗教的ではないが、スピリチュアルだ (I am not religion but spiritual)」という者が非常に増えているのです。そういう人たちの多くは、特定の宗教や宗派には関わっていない「無所属派」であり、約六十年前はたった一％だったのが、今はなんと二十三％となっているのです。そして若い人の中では、無所属派は三十三％だそうです。つまり、非常に宗教的な国だと言われてきたアメリカでさえ、特に若い人の宗教組織離れが目立っています。しかし、これは必ずしも宗教へ無関心ではなく、宗教自体に興味を持っている人はけっこういると思われます。そういう人たちが、このスピリチュアリティ・スピリチュアルのことに興味を持っているのです。

その中で、アメリカの仏教は、スピリチュアリティとして捉えられている側面が強いと言えます。要するに、メディテーション・瞑想に惹かれたリチャード・ギアやスティーブ・ジョブズが象徴するように、多くのアメリカ人は、スピリチュアルのキーワードに興味を示すのです。瞑想を行うことで、特に、連帯性 connectedness や一体性 unity や落ち着き centeredness という言葉が示す精神的・身体的な効果があると言えます。

次は、アルベルト・アインシュタイン (Albert Einstein) についてです。アインシュタインは説明する必要のない有名な方ですね。アインシュタイン博士は実は宗教にもかなり興味を持っていて、宗教が発展してきたことにまで言及しています。すなわち、「畏れの宗教」(religion of fear) から「道徳の宗教」(moral religion) へ発展してきたが、今後必要なのは「広大無辺の宗教」(cosmic religion) であると主張しています。その広大無辺の宗教を

このように定義しています。

「それは、人格的神を超越し、硬直した教義や神学を避けなければならない。自然と精神の両領域を含み、自然と精神の全てが、有意義な一体として体験される宗教的感覚に基づかなければならない。仏教こそこれらの要素を持っている。もし近代科学に対応できる宗教があるとすればそれは仏教である」

このように、アインシュタイン博士は、仏教こそが今後必要となる宗教であると断言しているのです。

アメリカ浄土真宗の状況 ― アンケート結果

次は、アメリカにおける浄土真宗にかかわっている人が、どのように教えを理解し味わっているかということを、数年前、米国仏教団（Buddhist Churches of America）の現役開教使と門徒さんたちを対象に、アンケートを持って調べました。結論から言うと真宗は、今日の言葉で表すと「信じる宗教」ではなく「目覚める宗教」として捉えていると言って良いと思います。

まず、四十六人のメンバーズ（門徒の方々）に回答を求めました。最初の質問は、「貴方にとって阿弥陀仏とはどういう意味を持ちますか？」でした。この質問について次の四つの選択から、一つか二つ選んでももらいました。後にある人数は、各答えに対する回答者の数です。

- | | |
|-----------------------|------|
| ①「西方浄土に存在する仏」 | 七人 |
| ②「至上者だが、キリスト教の神とは異なる」 | 十四人 |
| ③「智慧と慈悲の象徴」 | 三十九人 |
| ④「日常生活にはたらくいのちの人格化」 | 十八人 |

これを見ますと、際立って多いのが「智慧と慈悲の象徴」です。ですから、阿弥陀仏とは十万億土の彼方にいらっしゃる仏というイメージではなくて、

「智慧と慈悲の象徴」であるという捉え方が最も多いのです。「智慧と慈悲の象徴」は、英語で a symbol of wisdom and compassion と表現されます。

次は、十七名の開教使（皆僧侶）に聞きましたが、質問は少し異なり、「仏教の初心者には、阿弥陀仏をどう説明しますか？」でした。

- | | |
|----------------------|-----|
| ①「西方浄土に存在する仏」 | 〇人 |
| ②「至上者だがキリスト教の神とは異なる」 | 〇人 |
| ③「智慧と慈悲の象徴」 | 十六人 |
| ④「日常生活内にはたらくいのちの人格化」 | 九人 |

回答は、メンバーズ（門徒の方々）とは同じ傾向で、象徴的・一元論な答え（③と④）が圧倒的に多く、逐語的・二元論（第①と②）ではありませんでした。敢えて言えば、開教使の答えの方がメンバーズより、もっと象徴的・一元論となっていると思います。

三つ目の質問は、メンバーズ（門徒の方々）に対しての「貴方にとって浄土とはどういう意味を持ちますか？」でした。

- | | |
|-----------------------|------|
| ①「西方10万億土の彼方にある場所」 | 二人 |
| ②「場所ではなく仏に成る涅槃に等しい状態」 | 二十九人 |
| ③「ところが清浄された状態の表現」 | 二十三人 |
| ④「亡き人が生まれていく場所」 | 三人 |

そして、開教使の先生方へは、「仏教の初心者には、浄土をどう説明しますか？」という質問に答えて頂きました。その結果は、この通りです。

- | | |
|-----------------------|----|
| ①「西方10万億土の彼方にある場所」 | 二人 |
| ②「場所ではなく仏に成る涅槃に等しい状態」 | 十人 |
| ③「ところが清浄された状態の表現」 | 七人 |
| ④「亡き人が生まれていく場所」 | 二人 |

以上が示すように、「浄土」に関する質問も、「阿弥陀仏」への質問と同じよ

うに、象徴的・一元論な答えが、逐語的・二元論よりも明らかに多かったのです。この結果は、色々と解釈とできると思いますが、私は、この講演で強調している「目覚める宗教」の傾向の現れを裏付けていると考えます。つまり、一般に言われる「目で見えない」阿弥陀仏とお浄土を、「信じる宗教」の特徴である「死後」(life after death)と「超越的」(transcendent)な存在として捉えるよりも、「目覚める宗教」の特徴である「今生」(this life)と「顕現的」(immanent)に捉えているのです。

瞑想・メディテーション — 善導の「五正行」の採用

次は、アメリカの浄土真宗のお寺での瞑想・メディテーションについてです。現状として、ほとんどの法要で、特に子供がいる法要では、一分ほどの「メディテーション」という時間が設けられています。その理由の一つは、メディテーション抜きでは仏教ではないという先入観が挙げられます。もちろん真宗の僧侶もメンバーズの指導者たちも、メディテーションを持って真宗の重要な行とは思っていません。これで勝負するなどという考えは一切ありません。つまり、方便として、そして真宗への入り口としてメディテーションを提供しているということがよく言われています。

私自身も、北カリフォルニアのお寺で三年間住職を務めました。その最初の時期には、電話がお寺に入り、「あなたのお寺では瞑想しますか」という質問をよく受けました。私は「浄土真宗ですので、瞑想は行いません」と言っていたのですが、そうすると「それは残念、グッドバイ」という調子で、ほとんど新しい人たちがお寺に来てくれませんでした。その後、対応の仕方を変えて、「念仏メディテーションを行います」と言って、興味を持ってもらいお寺に来てもらうように努力をしました。

その際、私としては善導の「五正行」を採用した念仏メディテーションを

試みました。「五正行」には礼拝・読誦・観察・称名・讃嘆供養がありますので、これらを実践の枠として採用いたしました。一般アメリカ人にとって、本堂に入ってお辞儀することすら「めずらしい」行為であり、それを五正行の「礼拝」と位置づけ、「メディテーション的な行為」と説明しました。そして、お焼香 (incense offering) をメディテーション的に一つ一つの動作に集中し行うように指導し、それを五正行の「讃嘆供養」と位置づけました。その後、『重誓偈』や『十二礼』などを一緒に称え、五正行の読誦を満たすことにしました。

次に、彼らが求めるメディテーションを「観察」という形で行うことにしました。観察は、先ずはマインドフルネス瞑想のような形をとってもらって、最初にマインドフルネス瞑想の呼吸法を数分行います。ただそれは始めだけで、もう少し深まっていくと、「観察」として我々を支えてくれている「いのち」を念想、つまり、心に浮かべてもらいました。そこで彼らには、一、食べ物や空気という物質的ないのち、二、両親の愛情や仲間の友情という精神的いのち、そして、三、教育制度や医療制度という社会が提供してくるいのち、という三つのジャンルで個人的に浮かんでくる対象を、観察するように指導いたしました。

以上のように観察してもらい、その対象となった好物な食べ物（物質的ないのち）や一生忘れない親の助言（精神的いのち）や公立中学で刺激と感銘を受けた授業（社会的いのち）が、最終的には阿弥陀仏という無量寿（計りきれないいのち）のはたらきに繋がるのだと説明しました。そして、その無量寿である阿弥陀様を更に意識し、体で感じてもらうために、五正行の「称名」として五分～十分ほど念仏と一緒に声を出して称えました。時には、常行三昧行のように歩きながら称えましたが、最後には、座って合掌して称えました。このように私は、アメリカ人が求める「目覚める宗教」の実践とし

てメディテーションを、禅宗でもなく南方仏教でもない、我が七高僧の一人である善導が提唱した「五正行」という枠に基づき、真宗の教えに導くことを目指しています。

来年の夏、アメリカに戻って、いくつかのお寺で講演やセミナーを行うことになっています。私は特に改宗者の人たちが多くお寺を狙っているのです。改宗者とは、大人になって真宗の門徒となる人たちです。そのような改宗者は、ワシントン州のスポケーン市やコロラド州のデンバー市という地方都市のお寺で増えているのです。その多くも、仏教のメディテーションに惹かれてきているのです。私は、そういう人たちにどのように対応し、真宗へ導いていくかという課題に興味を持っています。その中で、先ほど話したように念仏メディテーションなどを試んでいます。

現代日本人の変化しつつある宗教性

最後の課題になりますけど、現代日本人が求める宗教性について話したいと思います。ただ、「現代日本人」ですので、これは私よりも皆様の領域だと思いますが、私の観点から話させてもらいます。

数年前、ティック・ナット・ハーン師の弟子たちのグループが来日し、東京の日比谷公堂でマインドフルネス瞑想の集いを行いました。なんと千人ほどが集まりました。私としては、驚きでした。それは、千人という数だけでなく、参加者のほとんどが四十代以下の若い世代でした。二十代の人も結構多くいました。そして彼らは、三時間の集い中、ずっと付き合って真摯に聞いて、瞑想の実践にも積極的に関わっていました。これを見て、私は日本人の宗教性のパラダイムシフト（構造の変貌）が起こっていると感じました。

特に宗教的に真剣に求めている人は、以前のように伝統的な宗教の説き方にはそれほど興味がないように見えます。一方、日比谷講堂での集いのよう

に、マインドフルネス瞑想という新しい形だったら惹かれるようです。しかし、アメリカほど瞑想が日本で流行るかどうかは、私はまだわからないと思っています。ただマインフルネス瞑想は、思ったより日本でもかなり人気をよんでいるのは確かです。

もうひとつ、私は最近ある新興宗教の集まりに、友人の誘いで参加しました。その教団の教えは、どちらかというと仏教的ですが、それを自己開発な枠の中で心理学的な説き方をしていました。なんと一万人ほどの参加者があつた大きな会場に集まってきていました。そこには、若い人も熟年層も同じぐらいいて、皆さんの様子からは別に「変わった人」というのではなく、ごく普通の日本人という印象でした。その集いには、すごい活気が感じられ、参加者は非常に興味を持って集まってきたというように感じました。

教祖様による講演以外には、別な会場ではたくさんのテーブルが用意されていて、人々は、テーマごとに興味があるテーブルへ集まっていました。テーマとしては、家業の課題、仕事の問題、人間関係、そして自尊心など取り上げられていて、各テーブルでの指導者のような方と相談できるような仕組みになっていました。私としては、教祖の先生を崇拝し過ぎる傾向には、強い抵抗を感じざるを得ませんでした。参加者の熱意と積極性には感心いたしました。この世に起こる日常の問題に真剣に、目を向けているということが伝わってきました。この集いも、現代日本人の宗教性の一角を表していると思います。

現代社会の五つの特徴

最後に、現代社会の特徴として五つの特徴があげられると考えています。その五つとは、平等化、理性化、多様化、世俗化、個人化です。ここに興味のある方は後ほどレジュメをよくご覧になってください。私はこのような現

代社会の変化が起こっているゆえに、仏教もそれに対応する必要があると強く思います。

特に第一の平等化と第二の理性化という特徴だけをとりあげますと、先ずお寺では、女性や在家者の能力や専門性をもっと活かすべきであると思います。男性の住職にのみ頼っているのは、指導力が乏しくなり、お寺の人間資産をフルに活用していないということになります。例えば、女性の僧侶や門徒さんの能力や経験を活かして、「子育て」や「人間関係」などという日常の課題に関する公演会やワークショップをお寺で行ってはいかがでしょうか？

第二の理性化というのは、我々現代人全てが科学的な世界観や考え方に基づく教育を受けてきたということです。できごとの検証を重視する現代人は、「信じる宗教」よりも「目覚める宗教」に惹かれる傾向にあります。この目覚める宗教には、身体性に対応する実践が好まれ、そこには「体験」(experience)という検証的な営みがあるのです。これをある程度、満たしてくれるのがメディテーションなのです。

ただもう一度強調致しますが、「真摯な信仰・真摯に信じる」ということを否定しているわけではありません。前も述べましたように、信じる行為の重要な要素である「委託」(お任せする)も、親鸞聖人が説かれた信心の一角であります。しかし、それだけが重視されてしまうと、我々が懸念している誤解された真宗のイメージができあがってしまうのです。

ま と め

まとめてみますと、次の四点に絞ることができると思います。

一、欧米の親鸞のイメージは正確ではない。これを是正することが急務であると考えています。私ができることは、西洋、特にアメリカにおいて文書活動などを通して親鸞・真宗のイメージの是正に務めたいと思っています。

ます。そして、日本では何ができるかという課題が残ります。これは、龍谷大学に所属される皆様の肩にかかっていることですが、今日の私の講義から、何らかの示唆、または刺激があったならば非常に嬉しいです。そして、それを実行に移して頂ければと思います。

二、親鸞の教えが根本に「目覚める宗教」であるという点を強調することが重要だと思います。それが、内外の宗教形態が変容しつつある中で、現代人により魅力的なものとなると思われます。但し、再度強調致しますが、「委託」という信心の側面は否定されていません。

三、親鸞の教えは、この世のみを説く他宗教の教義とは異なり、「この世」と「あの世」の両方の課題に対応できる総合的なトータルパッケージの教えであるということが言えます。禅宗などでは、死後に関する教えは希薄なようです。しかし世の中には、死後の答えを求める人は多くいます。もちろん、浄土真宗は死後に関する教えは充実しています。この点に加えて、今生においても信心を中心とする「目覚める宗教」を強化することで、この世とあの世というトータルパッケージである有意義な教えであると理解してもらえるのです。このように、「この世」と「あの世」の両方の課題に対応できるトータルパッケージの教えは、現代社会においても強みとなると確信しています。

四、最後の点ですが、目覚める宗教として現代人にとって有意義であり続けるためには、我々が「伝統」と「己証」という両視点のバランスをとり、教学的な営みと教育の工夫を怠らないことが必須であると思います。伝統的な解釈とリベラルというか進歩的な解釈、または信じる宗教と目覚める宗教の二つの視点は、もっとぶつかり合って、お互いを刺激し、お互いが反省し、お互いが向上していくということが理想だと思っています。これこそこの本学会の役目と責務ではなでしょうか？

以上です。どうもご清聴ありがとうございました。

【質疑応答】

質問者

メディテーションの用語の中に「マインドフルネス」というのが最初につきますが、この前の内容はどのようにとらえるのが正確なのか？さっき先生の話の中に日常生活の中の普通に一般的に体験するような出来事を、素材にしながらどのような恩恵に私どもは携わっているか。目を閉じて心静かに思い浮かべてみましょうという風なことですと、非常に具体的でとらえやすいんですけど、そういうことをマインドフルネスということは形容して物語っておりますでしょうか。……

A ケネス先生

アメリカで盛んになっているマインドフルネス (mindfulness) は、上座部仏教から伝わったものです。その元は『四念処経』で説くサティパターナ (satipatthāna) という瞑想法にあります。サティ (sati) というのは、念仏の「念」と訳され、仏教で広く伝わっている瞑想法です。サティパターナは、段階的に、身体 (kāya) から始まり、感受 (vedanā) と心 (citta)、それから法 (dharma) へと進みます。最も初歩段階が、身体に関する呼吸法なのです。これこそ誰でもが入っていけるので、「マインドフルネス」と呼ばれ、アメリカでは一種のブームとなっています。

それを実践することによって、いろいろな効果があると言われています。それらもたくさんの科学的な論文によって裏付けられています。それが、人気を後押しして、刑務所からカウンセリング、病院、学校、企業、軍隊までも採用されているのです。マインドフルネスを実践することによって、心

が落ち着いたり、免疫が高まったり種々な効果があると言われていています。特に鬱病の再発防止に良いとも報告されています。

つまり、このような、世間的な効果があるよということですからごく人気が出ているのです。一方、このブームの中で、どれほどの人が悟りを真剣に求めているかとは、仏教の観点からは気になり、そのような批判は出ています。しかし、これは日本の企業が新入社員に座禅をさせるという修養的な営みとは、それほど変わらないとも言えるでしょう。

質問者

私ども信心につきましては、インタイング（entering 入る）という段階を翻訳段階で承っておりますが、先生今日は、アウエイクニング（awakening 目覚める）というところまでおっしゃっていただきました。そうしますと信心にはただ一段階だけあるのではなくて、信心の道があるという、以前に信楽先生がおっしゃいました。ところが、伝統的にはそのときは、それは否定されているんですね。私はそれに非常に可能性があるように思えまして、先生も同じことをおっしゃったんじゃないかとそれを確認したい。

A ケネス先生

質問趣旨を完全に捉えているか分かりませんが、信楽先生は、信心とは、貴方のお言葉では能入（インタイング）ではなく、能度（アウエイクニング）と仰った、と私は理解しています。はい、私はその見方に賛成しています。

また、この能度（アウエイクニング）の段階で、信心の四つの側面がどのようなプロセスとして現れるかは、重要な課題です。それは、今後の私の課題で、もっと整理しないといけないと思っています。ただ今日、私が言いたかったのは、委託の側面だけに集中するのは問題だということです。だから

欧米のイメージがこのように問題になっているのだよというのが、今日、私が主張したいところです。

質問者

長年、妙好人研究をしていまして、それが昭和二〇年一八年九年から鈴木大拙氏の『妙好人』という本が出まして、一時は大拙氏から離れて行ったんですけど、またご縁があってまた大拙氏のことを改めて勉強させていただいています。今年ちょっと『鈴木大拙氏の妙好人研究』という本を出版させていただいたんですが、今日はポール・キュラス（Paul Carus）とか釈宗演氏の写真を見せていただきまして、大変ありがたかったです。大拙さんが特にアメリカで八十歳九十歳近くまでずっと仏教の講義をされて、いろんなところで講演をされたのですね。その禅というものと特に最晩年は妙好人三昧だったと。今ロンドンにおられます佐藤平先生が論文に書いてくださっていますけど、現在の状況で禅というものと念仏・真宗というものがどのようにアメリカではひろがっているのかと。そのアメリカの妙好人というのも、先年那須英勝先生が論文に書いていただいたり発表されたりしています。最近の新しく出版された書物のなかに「A Study of Saichi, the Myokonin」という浅原才市の妙好人研究があります。こういう論文が発見されて、その翻訳の後の校閲には那須先生と私が担当させていただいています。

A ケネス先生

はい、ご質問の趣旨は大体分かりました。お聞きされたいことは、アメリカにおいて念仏と真宗と禅の広まりということですか？

質問者

はい、その関係とか広まりとか……

A ケネス先生

瞑想を中心とする改宗者のグループは、だいたい三つのグループに集中しているのですね。リチャード・ギアやスティーブ・ジョブズ、そういう人たちはまず禅宗、禅というグループに所属していました。これには、ベトナム禅や韓国禅も入ります。二番目がチベット仏教、三番目が東南アジアの上座部仏教です。この三つの流れには、みな共通するところとして、誰でも比較的楽に関わっていける瞑想法・メディテーションを提供しているのですね。従ってそういう面では、瞑想を重視しない真宗は、残念だけどこの中に入っていないのです。

しかし、アメリカの場合、真宗のお寺で瞑想をどのようにもっと真剣に扱うかどうかという課題に迫れているのです。それは、西海岸のワシントン州で、シアトルから東へ五時間くらい運転していくと、スポキャーン (Spokane) という都市があるのですね。今度来年の夏に行く予定になっていますが、小さいお寺ですけど日系人がほとんどいなくなりまして、お寺を解放したら参加者がほとんど白人の方となり、この真宗の寺がガラッと変わったのです。今後、このように新しく真宗の寺に出入りし始めた主に白人のひとたちに、どう真宗を説いていくかが大きな課題となっています。

またスポキャーンには、住職・開教使が不在であるということも課題の一つです。責任者であるシアトル別院の輪番も、四百五十キロ離れている寺には、一年に一回程度しか行けないという現実です。目下、得度を受けた方が二人ほどいますが、教師の資格はまだ持っていません。

このような現状の中、新しく仏教に興味を持った人たちに真宗的に養成していくためには、何らかの形で体を通しての理解を導入しないと、興味を持

ってもらふことは難しいと思います。特に、彼らの大半は「真宗」ではなく、「仏教」に惹かれてお寺に来ているからです。そして、仏教に改宗する人々は、教義だけだったらユダヤ教もキリスト教もたくさんあると言い、頭だけで理解する教義にあまり興味を見せないのが現状です。やっぱり、体を通しての参加、それはやっぱり瞑想的な形式となるのです。

私は「声を出す瞑想」っていうのもあると思うのです。だから私は、先ほど述べたように「五正行」を枠として取り上げています。なぜかという、これは浄土教の伝統ですからです。わざと禅宗に行かなければならないという必要性は、ぜんぜん（禅禅）ないと考えるからです。（笑）善導大師の教と行を代表する「五正行」をもっと活かしていくべきではないでしょうか？ 私はこの種の瞑想を、「念想」（念仏メティテーション）と日本語で、そして Nembutsu Meditation と英語で呼んでみることにしています。

私は、その「五正行」の中核である「称名」を日常、例えば電車に乗った時、マインドフルネス瞑想の形の中で称えるように心掛けています。マインドフルネス瞑想のように、鼻から呼吸をします。その際、呼吸をするということは、いのちの元である酸素が私の体の中に入ってきます。そして次には、鼻から息を吐きます。マインドフルネス瞑想の場合は、呼吸自体に集中しますが、私は、それだけではなく、息が鼻から出る時には念仏を心の中で「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と称えます。それは、報恩感謝の気持ちの表れです。つまり、頂いた酸素といういのちへの感謝を表す称名報恩なのです。

ただ、この酸素は、既に述べました物質的・心理的・社会的の「いのち」を象徴するのです。その酸素と呼吸と「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」の称名は、「念想」を行うことを通して、私にとっての「阿弥陀」というはたらきとして味わわせてもらっています。

今後私は、このような「五正行」の枠内で Nembutsu Meditation（念想）

を方便とし、親鸞聖人の教えを極めてもらうように指導し、私も実践させてもらうつもりです。これが、私の「アメリカにおける念仏と禅の広まり」という質問に対しての一部的なお答えです。

【終了】

註

- 1 佐々木閑『ブッダ真理の言葉』NHK 出版、二〇一二年、一一一～一二頁。
- 2 『真宗聖教全書』二、五九頁。『浄土真宗聖典全書』二、八十頁。
- 3 『真聖全』二、五二〇頁。『聖典全書』二、四八五～四八六頁。
- 4 『親鸞全集・和讃篇』、一四五頁。
- 5 『真聖全』二、三三頁。『聖典全書』二、四八頁。
- 6 長尾佳代子「芥川龍之介『蜘蛛の糸』原作の主題—ポール・ケーラスが『カルマ』で言おうとしたこと—」『仏教文学』第二七号、一六一～一七二頁。